



—陶 卵殻—

山元規子展

Yamamoto Noriko

2013年11月7日(木) — 12月2日(月)

開館時間 10:00 a.m. — 6:00 p.m. 水曜日休館 ※11月24日(日)のみ臨時休館

LIXIL
ギャラリー

LIXILギャラリー ガレリアセラミカ
東京都中央区京橋3-6-16東京建物京橋ビル LIXIL GINZA 2F
〒104-0031 phone 03-5250-8530
CERÁMICA NOTE No.197 制作発行:株式会社LIXIL デザイン:IT IS DESIGN 撮影:齋藤梨文

ランカク 2012
D33×W52×H18cm

ランカク 2012
D47×W47×H18cm

表紙:1b O flowers born of egg-
2009 D30×W20×H16cm
上:ランカク 2013
D31×W31×H18cm

茹でたてのまだほんのり温かい白い卵

— 山元さんの作品は、卵の殻をモチーフにした薄くて精緻な作品です。なぜ卵の殻を選ばれたのですか

山元：京都造形大学陶芸コースに通っていた時、大学のスクーリングで皆さんとても上手い方ばかりだったんです。社会人から入学した私は、それまで月に3回くらい陶芸教室でお茶碗などをつくった経験しかなく、何にも分からず入ったので、やっていけるのかたいへん不安でした。

2年生の時に3日間で制作して作品を合評してもらった授業がありました。何をつくっていいのかわからなかったら、たまたま泊っていたホテルで、大きなゆで卵がサービスで2個も朝食に出たんです。茹でたてのまだほんのり温かい白い卵で、触れた感触がとても気持ちよくて、食べてみたらすごく美味しく感じたんです。今日はこれをつくろうと卵を持って大学に行きました。卵の殻に触れるようにつくる感覚も心地よく感じられて、それ以来卵をモチーフにつくり続けています。先生にも褒めて頂いて、その時に初めて陶芸をやっているのいいのかなと手応えを感じた作品でもあります。

— 輸送が怖くなるほど繊細な作品です

山元：薄くて、とても繊細なので衝撃にも弱いんです。公募展に応募しても、写真審査の後、現物を送ろうとしたら受け付けてもらえないこともありました。作品を展示する際の強度や輸送に耐えられるように、これまで作品をじかに木の板や花びらのような台に貼り付けてみたり、網状のかこのようなものをつくって乗せたりと工夫してきました。色々試していますが、作品の世界観と展示台がなかなか上手にかみ合わず、まだ迷いもあって、今後の課題の一つです。

— 磁土を扱い繊細な作品をつくるには、苦勞をされたのではないのでしょうか。磁土の白さにもこだわりがあるのでしょうか

山元：最初は扱うのがすごく大変でした。花びらのような先端の部分はかなり薄く伸ばすのですが、少し伸ばしただけでも切れてしまいました。磁土だけだと難しいので先生にご指導頂き、スーパーボンドとセルペンを少し加えて、半磁土くらいの感じで一年以上つくっていたんです。でも納得がいきません。たまたまそれらを入れないで、小さな作品を焼いてみたら、出来上がりの透明感と白さが全然違ったんです。それで、どうしてもこの白さでつくりたいと思い技術的にもずいぶん練習しました。土選びにも時間が掛かり苦勞しました。色々な地域の磁土を取り寄せて比較したり、色々な方にアドバイスを頂き、試行錯誤の末に九州の天草陶石に決めました。私の使いやすい

ランカク 2013
D15×W15×H11cm

い固さに調節して頂いているんですが、とてもつくりやすくなりました。ここ3、4年はこの土で落ち着いています。

— 黒陶でつくられた作品もあります

山元：大学の卒業制作で、初めて黒陶を経験しました。重厚な黒の色とダイナミックで繊細な「ランカク」のかたちが上手く重なり合いました。この頃は大きい作品を磁土でつくるのは技術的にも難しかったので、小さい作品は磁土でつくり、大きなダイナミックな作品は陶土でつくっていました。今回の展示では磁土に黒の顔料を入れた作品も少しお見せできればと考えています。

— 扇形から始まり、近作では少しずつかたちも変化して、透明感と密度も高まり大輪の花のようなイメージもあります

山元：作品のかたちは、中心から外に向けてボリュームを増していくのですが、花のイメージは持っていません。私は伊藤若冲がすごく好きで、赤く鮮やかな南天の実と軍鶏が描かれている「南天雄鶏図」を見ていると、1枚1枚、1粒1粒が細かく描き込んであって、羽や南天の実の密度が高くて、息が詰まりそうなくらいです。この作品を見ていると、もっともっと、とことん埋め尽くすようにつくってもいいように思うんです。

マケットや図を描いて作品をつくるのではなく、つくりながら次に繋げていく制作方法ですが、自分のやりたいことや入れたいものを作品にどんどん入れて挑戦したいと思っています。

自分の目で素敵なものを見える

— 山元さんは陶芸教室から大学の陶芸コースへ進まれました

山元：一緒に暮らしていた高齢の父が、若い頃から顔を習っていて、亡くなる直前まで続けていました。主人もものづくりが好きで定年で仕事を辞めてからは、木工を始めて毎日生き生きと生活をしていました。そんな周囲の姿を見て私も生き生きと過ごすために、本気で取り組める事を見つけなければと、不安もあって自分探しをしていたんです。

そんな時、京都造形大学の陶芸コースの通信教育を見つけたんです。それまで陶芸教室に通っていただけでしたので絵も描けないし、初めは無理かと思ったのですが、大学の入学相談で「字は書けますか、丸は書けますか。大丈夫です、いらしてください。」と言われ、ならば本格的に学んでみようと思い切って通い始めました。

— 陶芸を始められたきっかけはなんですか

山元：主人の単身赴任中に、父と水戸に住んでいたのですが、父も90歳を過ぎると足腰が弱ってきて、私も家にいることが多くなりました。それで主人が帰ってくる日曜日だけは自分の自由な時間ができたので、空間の陶芸教室に通い始めました。お茶碗を制作したり、ロクロをひく程度でしたが、先生や友人にも恵まれて、静りにあちこの陶器のお店を見て回ったり、美術

ランカク 2013
D44×W58×H16cm

館巡りをしたり、こんな素晴らしい世界があるんだと思いました。

昔から美術館にもよく行きましたし、色々なものを見に出掛ける事が好きでした。就職して初めてのお給料で、土瓶とお茶碗を購入したこともあります。とても素朴な作品で惹かれました。生まれて初めて購入した作品でしたので、今でも思い出があり、未だ一度も使っていないんですよ。絵を見るのも好きですし、日常の中でも様々なものを目にして、良いなと感じれば自分の中の血となり肉となると感じています。

若い頃からどの作家の何の作品だとかが気にならず、自分の目で素敵なものを見たり、刺激を受けたりすることが私にとっては大切なことです。

— 今回の個展はどのようになりそうですか

山元：2011年長三賞、2013年神戸ビエンナーレ入選をして、ただつくっていれば楽しかった時期から、誰かに見てもらえて嬉しい時期も過ぎ、色々な葛藤があります。個展は、客観視して自分の作品を見る良い機会にもなりますので、次の作品に繋がるようになればよいと思っています。

ランカク
2012 D50×W50×H8cmランカク 2013
丸15×15×H11cm
丸D10×W10×H8cm

山元 規子プロフィール

2009年 京都造形芸術大学 芸術学部陶芸コース卒業

2012年 山元規子展 ノブズギャラリー（空間）

2011年 第30回長三賞常滑陶芸展 入選

2012年 第46回女流陶芸展 入選

2013年 神戸ビエンナーレ2013現代陶芸展 入選